

### （１）本年度のN I E活動の概要

研究指定校 1 年目の本校では、①生徒が新聞を通してより文章に触れることができる機会を増やすこと、②教科授業のなかで新聞を活用して生徒が生きる実社会とのつながりを感じる学びを設計すること、③授業理論と実践の往還の中にNIEを盛り込む、上記 3 つのことを目標としてNIEの実践を計画した。

上記の目標を踏まえ、本年度は公民科、家庭科、総合的な探究の時間において、NIEの実践を行ってきた。その際、新聞をただ読ませるのではなく、記事の内容を分析するとともにそこから思考し、生徒自ら判断する学習を構築することを目的に、研究指定校 1 年目の実践を行った。

これらの実践では、生徒が学ぶ教科授業や各種の学習活動と、実社会で起きている様々な事象のつながりを、生徒が感じ、考察できるような学びを行うことができた。また、今回の実践は特定の学校、生徒、教科に限定されるものでなく、多くの学校、教科で置換できるものにするのを念頭に実施した。

### （２）本校のN I E活動の取り組み状況

本校は全校生徒 838 名、各学年 7 クラス、全 21 クラスの全日制普通科の公立高校である。部活動が盛んな学校であり、生徒の活躍や各部の全国大会の様子を、新聞記事で取り上げていただく機会にもめざまれている。

2025 年度よりNIE研究指定校に認定されたが、それ以前から信濃毎日新聞、読売新聞、朝日新聞、日本経済新聞、市民タイムス、Japan Times などの各種新聞が、図書館で購読できるようになっており、日常的に新聞に触れられる環境を作ってきた。また、教科によっては授業で新聞を活用したり、発表の形式の一つとして、新聞のレイアウトを使用した授業など、教職員のなかには新聞を使う工夫をして、授業改善をはかっているものもいる。

一定数の生徒の家庭では新聞購読をしておらず、家庭で新聞を読む経験は少ない。新聞に親近感を持ってない生徒が多いことを意識した上で、学校においてどのように新聞を活用するべきなのかを今後も検討していく必要がある。

### （３）N I E活動の狙い（育てたい力）

本校では、「目指す生徒像」として、①基礎・基本の的確な定着の上に立ち、知性と感性の調和的な成熟が期待されること、②知育と体育の均衡が人格形成の与（あずか）り、総合的な学力の確実な向上が実現されること、③自己に対する厳しさと、他者に対する思いやりをもち、心身共に健康であること、以上の 3 つを掲げている。そのような目標を掲げている本校では、本年度の教科学習・特別活動でのNIE活動を通して、以下のような力を育てることを狙いとした。

- ① 現代社会をあらわす記事を読み、生徒自身の教科学習とのつながりを見出す力
- ② 新聞から得た情報を収集し、整理、表現する力
- ③ 正確な情報から記事を作成するプロセスを、生徒自身の思考・判断・表現をする学習に置換する力
- ④ 実社会を映す記事を、探究的な学びや進路学習、その他特別活動に生かし、現代の諸問題を「自分ごと」としてとらえる力

#### (4) 全校での取り組み

##### ① 教科教育での実践

フードデザイン（2学年・家庭科）では、食生活や栄養、食品管理などについて、生徒主体の調べ学習を行った。「ビタミンの効果ってなに?」「健康的な食生活をおくるには?」「おいしい弁当を毎日つくりつづけるには?」といった生徒が立てた問い（学習問題）について、関係する新聞記事や図書館の書籍、信憑性の高いインターネットの記事などをもとに、自分なりに答えを導きだした。

さらに、学習のなかで分かったことを他者にわかりやすく伝えるため、新聞の紙面のようなかたちで学習成果をまとめた。新聞の見出しのつけ方を参考に、見てもらえるよう、生徒それぞれで工夫をして作成することで、自分の考えたことを表現することができる学びになったと考えている。



図 1 フードデザインで作成した新聞

##### ② 総合的な探究の時間での実践

2学年の総合的な探究の時間において、信濃毎日新聞読者センターの皆様にお越しいただき、新聞を使った学習について、ワークショップ形式でご講演いただいた。配布された新聞記事のなかから、興味のある記事を見つけ、ワークシートを用いてまとめるとともに、まわりの生徒と共有する学習活動を行った。自分の興味を持った記事のなかのキーワードから、別のテーマへも関心が広がるようにアプローチしていただいた。

学習活動そのものが有意義なもので、それに加え、280名弱の生徒が一堂に会して新聞を熟読する様子そのものが圧巻だったと、NIEに関わる者として感じている。



図 2 総合的な探究の時間の新聞学習

#### (5) 公開授業などの活動内容

1. 日時 令和8年1月28日（水） 5時限目（13:50～14:45）
2. 場所 長野県松本蟻ヶ崎高等学校 1年2組 HR 教室
3. 学年・講座 1学年2組（40名）
4. 授業担当者 地理歴史・公民科 教諭 先 皇太
5. 科目・単元 公共「民主社会と政治参加」
6. 使用教材 教科書：帝国書院「高等学校 公共」  
副教材：浜島書店「最新図説 公共 2025」  
新聞記事：① 信濃毎日新聞 2022年（令和4年）1月3日（月）朝刊3頁  
「この夏に改選「良識の府」参院って？」

- ② 日本経済新聞 2025年(令和8年)4月1日(火)朝刊1頁  
「予算成立、初の参院修正」
- ③ 信濃毎日新聞 2010年(平成22年)12月4日(土)朝刊2頁  
「臨時国会閉幕 法案成立低水準55% 「ねじれ」を反映」
- ④ 東京新聞 2019年(令和元年)7月10日(水)朝刊  
「参院選経費1人当たり536円 予算571億円「一票無駄にしないで」  
※ 東京新聞サイト「Tokyo Web」より引用
- ⑤ 朝日新聞 2025年(令和7年)12月14日(日)朝刊3頁  
「定数減法案 今国会見送り」

## 7. 単元の目標

- (1) 三権分立の構造を正しく理解するとともに、日本の選挙制度や地方自治の基本原則と具体的な制度について知識を習得している。【知識・理解】
- (2) 権力分立や選挙制度、地方自治の諸課題(一票の格差、地方創生など)について、民主政治の原理に照らして多面的・多角的に考察し、主権者としてどのような政治参加が望ましいか、自分の考えを表現している。【思考・判断・表現】【技能】
- (3) 政治機構の監視や選挙への参加、地域社会(地方自治)での活動が、自分たちの権利や生活を守るために不可欠であることを認識し、社会の形成に主体的に関わろうとしている。【関心・意欲・態度】

## 8. 単元の構造

### (1) 生徒観

学習意欲は高く、授業に向き合う姿勢も熱心である。講義を聞く姿勢、授業内の学習活動への取り組みが積極的である一方、自らの考えや意見を、直接発言して伝えることには苦手意識を持っている生徒が多い。また、地理歴史・公民科における学びを「暗記」とらえている生徒が多く(年度当初の授業内アンケートより)、そういった生徒に対して、考える機会を提供するとともに、考えた結果としての「納得解」を感じられるような支援をしたい。

### (2) 教材・指導観

本単元は、「権力の抑制」と「民意の反映」の2軸をもとに構造的に学ぶものである。

三権分立による権力のチェック機能を前提としつつ、選挙制度を通じて主権者の意思を国政に届け、地方自治において住民自らが身近な課題を解決するという、「民意を形にするプロセス」を教材の核として扱う。

指導の際には、制度の解説にとどまらず、「政治の制度は国民の意思をどう反映しているのか」を可視化させる。そして、一票の格差、地方議会への関心など、民意の反映を阻む現代的課題を直視させ、学習者自身が主権者であることを念頭に、社会参画すべきかを多角的に考察させる。

## 9. 指導計画(全6時間)

- (1) 政治と権力、議院内閣制とは
- (2) 国会のしくみとその課題…(本時)
- (3) 権力分立と行政の役割
- (4) 地方自治の役割
- (5) 政党政治とメディア
- (6) 選挙制度とその課題

## 10. 本時の計画

### (1) 主な学習活動

前時で学んだ国会のしくみを復習した上で、教科書に示される「国会は衆議院と参議院の二院から成り（二院制）、議員の任期と選挙方法を異なるものにして、多様な意見を審議に反映できる仕組みを採っている」という二院制の長所を示した記述と、二院制に対して批判的だった思想家の言葉を比較し、両者の“ずれ”から、「二院制は政治にとって有効な制度といけるのか？」という“問い”を追究するかたちで教科書の本文をファクトチェックする学習活動の展開を目指す。また、“問い”の追究に関しては、松下（2021）が示す、「対話型論証」モデルという学習モデルを使用する。

【参考文献】松下佳代（2021）. 対話型論証による学びのデザイン学校で身につけてほしいたった一つのこと. 勁草書房

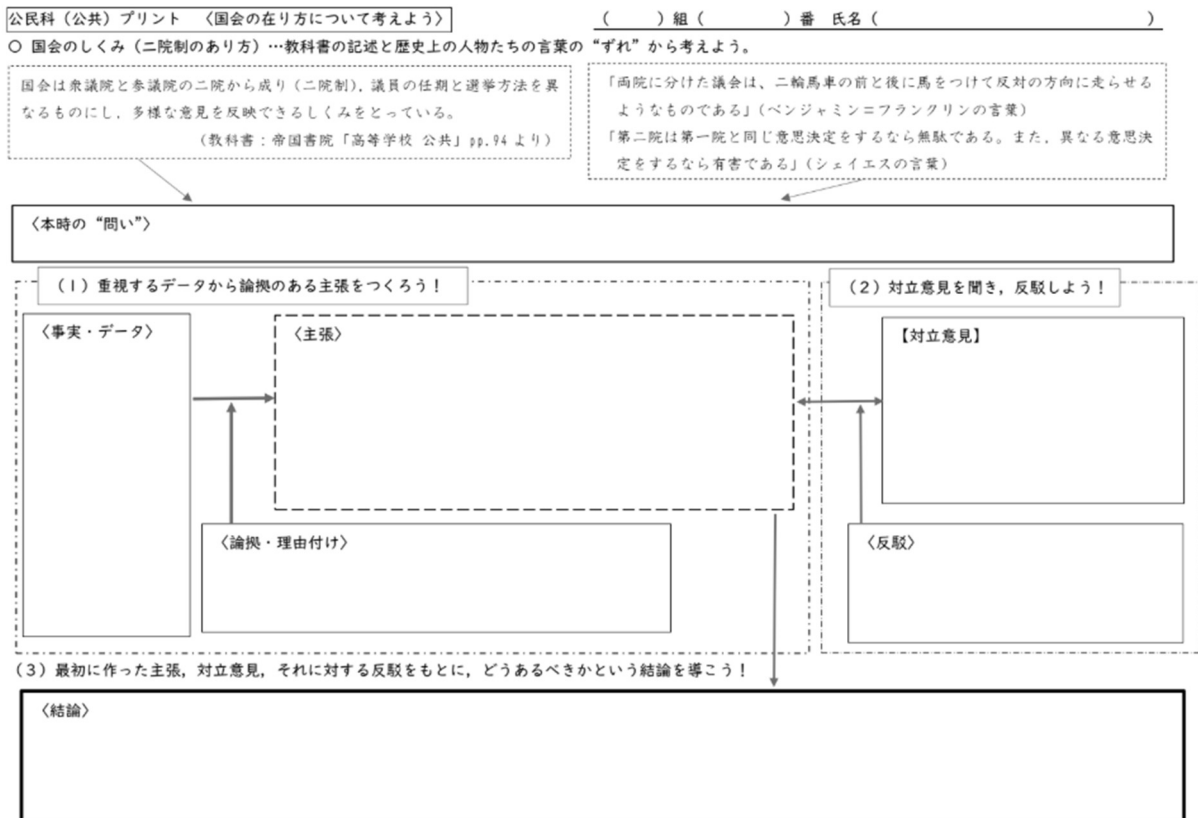
### (2) 本時の目標

- ・前時で学んだ知識・技能を前提として、新聞記事などからみられる参議院の機能や諸問題を読み取り、自ら得た情報をもとにした論拠ある主張を持ち、他者との対話の中で国会の在り方について思考し、それを表現できる。【思考・判断・表現】【知識・技能】
- ・我が国の国権の最高機関である国会の在り方に思考する主権者たる姿勢を養う。【主体的に学習に向かう態度】

### (3) 本時の展開

段階	学習内容	指導上の留意点（指導内容）	時間	備考資料
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の復習（国会の仕組みに関する知識の確認）</li> <li>・教科書に書いてある記述を改めて確認し、二院制の長所を確認する。その上で、ベンジャミン・フランクリンの言葉から、両者の“ずれ”をもとに本時の“問い”を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までに新聞記事①②を読ませ、二院制の意義を確認する。</li> <li>・前時で扱った知識、特に二院制のシステムについて確認する。</li> <li>・教科書の本文を生徒に読ませた上で、スライドでベンジャミン・フランクリンの言葉を示して、教科書の内容との間の“ずれ”を感じさせられるように伝える。</li> </ul>	10分	・スライド
本時の“問い”：二院制は国の政治にとって有効な制度といけるのか？				
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の“問い”をプリントに書き入れる。</li> <li>・新聞記事③・④を読み、ベンジャミン・フランクリンやシェイエスの考えの原因を読み取る。</li> <li>・前時、そして本時に読んだ記事から得られる情報をもと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリントを配布する</li> <li>・記事を配布する。</li> <li>・マーカーで二院制であることの問題点がなにかわかる記事のなかの文章にマーカーを引く。</li> <li>・個人的な感覚や憶測、単純な思いを主張にせず、データをもとにした論拠ある主張をつくるよ</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント</li> <li>・新聞記事③</li> <li>・新聞記事④</li> </ul>

	<p>に考えられる論拠をもった、自らの主張をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じグループで主張を発表し、自身と意見が異なる対立意見に対し、反駁を行う（それを交代で行う）。</li> <li>・主張、対立意見、それに対する自身の反駁を総合的に評価し、結論としての最終的な自分の考えをまとめる。</li> </ul>	<p>う指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対立意見に対する反駁は、論拠をもって反論したり、誤りや矛盾を指摘する行為であり、批判するものでないことを指導する。</li> </ul>		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに配布される記事を読み、国会のかたちは時代によって変わり、それは民意の結果であることを学ぶ。</li> <li>・次回の内容について聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨今議論を呼ぶ衆院定数削減問題から、国会のかたちは教科書に今書いてあるかたちではなく民意によって変わっていくことを伝える。</li> <li>・次回予告を行う</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞記事⑤</li> </ul>



### 資料 1 対話型論証モデルをもとにした授業プリント

（諸資料（今回は新聞記事）から読み取ったデータ・情報から自分の考えをまとめ、他者と意見交換でき、それらをもとに総合的に判断し結論をつくる形式になっている。）

#### (4) 学習のポイント

##### ① 新聞記事と偉人の言葉で仕掛ける、教科書の「正解」への心地よい揺さぶり

前時の新聞記事①・②で「二院制の意義」という教科書の理想をしっかりと裏付けたことが、本時の学びをより深いものに変えている。思想家フランクリンの皮肉な言葉と教科書の記述との間に生じる「ずれ」が、生徒の心に“ずれ”を呼び起こす。そこに「法案成立の停滞（記事③）」や「膨大な経費（記事④）」といった不都合な真実が重なり、「教科書の記述が正しいのか？」という疑問を、学びたくなるきっかけとして生み出すかたちとした。

##### ② 「暗記」から「納得解」に

「社会科は暗記だ」という先入観を超えて、松下佳代氏の「対話型論証」モデルを土台に、新聞記事を根拠にした「反論への再反論」という骨太な議論が展開される。ただ意見を言い合っただけで終わりにするのではなく、記事のデータを根拠に異なる視点をもみ合わせることで、社会の複雑さを丸ごと受け入れた「自分なりの納得解」を導き出す。複数の情報を多角的に読み解き、対話を通じて思考を深めていくプロセスは、主権者としての姿を育成しようとしたものである。

#### (6) 生徒の反応

公開授業 「二院制は有効な制度と言えるのか？」 -国会のかたちを主権者として考える-

教科書と歴史上の偉人の思想のあいだにある認識のずれに着目するなかで生じる、「教科書に書かれた記述が本当に正しいのか？」という疑問を起点に、二院制・参議院の存在意義を、二院制が有する長所、問題点をもとに、生徒主体で思考し、判断する授業を設計した。新聞記事のなかでみられる、「良識の府」としての参議院の位置づけ、参議院による法案・予算案の修正の実績、ねじれ国会による法案の不成立、選挙にかかるコストなどに関する記述から、生徒が自分なりの視点で、二院制の意義を思考することができたと考えている。

授業のなかで興味深い場面があった。二院制の必要性を主張する生徒が、「二院制であると法案が通らなかつたり、時間がかかる」という考えで二院制が不必要だと主張する生徒への反駁として、「なかなか国会で可決されなかつたり、時間がかかってしまうものは、そもそも丁寧に時間をかけないといけないものだと思う」という言葉をかけていた。“タイパ”が重要視される現代社会のなかで、時間をかけて審議することの重要性への気づきは、新聞記事を読み、自らの考えをまとめ、相手の意見に耳を傾け、反論する過程のなかで生まれた主権者意識の芽生えであったと感じる。

#### (7) 成果と課題

成果の一つとして、新聞を活用することで生徒主体の学習へと改善を図れたことである。新聞は他のメディアと異なり、読者が数多ある記事に目を通し、「読む」という主体的な行為をすることによって情報を伝える、いわば読者による情報発見メディアである。この特性からもわかるように、主体的な学習との親和性は極めて高い。そのような学習への改善を図れたことは成果だと考える。

また、研究授業における、新聞記事から主張をまとめる学びのなかでみられた主権者意識の芽生えは、NIEだからこそ得られた成果だったと感じている。選挙権がない年齢の生徒にも「私も主権者なんだ」と気づける場を提供する授業を、来年度以降も実施していきたい。

一方、課題もある。本年度の実践の中で、生徒が新聞を読むということに慣れておらず、授業においても読み方がわからない生徒が多いことが分かった。各社の新聞学習シートなどを用いて、日常的に新聞に触れる時間を捻出していきたい。